

蜜柑（I）

曇った冬の日暮である。^{わたくし}私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。

外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲



蜜柑 (2)

しように、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠けんたいとが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套がいとうのポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいっている夕刊を出して見ようと云う元気さえ起らなかった。



蜜柑 (3)

が、やがて発車の笛が鳴った。
私はかすかな心のくつろ寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりをはじめのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日ひ和より下駄げたの音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云いののし罵る声と共に、私の乗っている二



蜜柑（4）

等室の戸ががらりと開いて、十三
四の小娘が一人、^{あわただ}慌しく中へはい
って来た、と同時に一つずしりと
揺れて、^{おもむろ}徐に汽車は動き出した。
一本ずつ眼をくぎって行くプラッ
トフォオムの柱、置き忘れたよう
な運水車、それから車内の誰かに
祝儀の礼を云っている赤帽——そ
う云うすべては、窓へ吹きつける
^{ばいえん}煤煙の中に、未練がましく後へ倒



蜜柑 (5)

れて行った。私は^{ようや}漸くほっとした
心もちになって、^{まきたばこ}巻煙草に火をつ
けながら、始めて^{ものう} 懶い^{まぶた} 瞼をあげて、
前の席に腰を下していた小娘の顔
を^{べっ}一瞥した。

それは油気のない髪をひつつめ
^{いちようがえ}の銀杏返しに結って、横^{あと}なでの痕
のある^{ひび}皸だらけの両頬を気持の悪
い程^{ほて}赤く火照らせた、如何にも田
舎者らしい娘だった。 つづく